日本生涯教育学会北海道支部　平成24年1月1日

# 生涯学習だより

## 2012　新年を迎えて

日本生涯教育学会北海道支部長　佐久間　章

**平成24年の新春を迎え謹んでご挨拶を申し上げます。　昨年は、会員の皆様のご支援とご協力により、学習会（ネイバル洞爺）と第29回北海道研究集会（ちえりあ）を開催することができました。創立30周年を迎える本年も、引き続きご支援とご協力をたまわりますようよろしくお願い申し上げます。**

**さて、今回の年頭のご挨拶は、昨年11月19日に開催いたしました第29回北海道研究集会の開会あいさつを掲載させていただき、支部会員の皆様へのメッセージとさせていただきたいと思います。**

―　第29回　北海道生涯学習研究集会　開会挨拶　―

北海道生涯学習研究集会の開会に際しまして、主催者を代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。本日は、大変お忙しい時期にも関わらず、本研究集会にご参加くださいまして誠にありがとうございます。本研究集会は、道内の生涯学習に関わる研究者、実践者及び生涯学習に関心を持つ道民が一堂に会して、日頃の研究成果及び実践の発表・意見交換を通して、相互の交流を深め、協力関係の一層の促進を図ることにより、北海道らしい生涯学習社会の実現を目指し、毎年実施しているもので、今年は２９回目の開催となります。会場を利用させていただいております札幌市生涯学習センターには、毎年大変お世話になっております。ありがとうございます。

さて、今年３月に発生いたしました東日本大震災は、未曽有の被害をもたらしました。この大震災によって、倒壊、流出、地盤沈下、外壁・天井の落下、ガラスの破片などの被害を受けた文教施設は11,816施設と報告されています。公立社会教育施設に限ってみると1,784件が被害を受け、その約半数が公民館ということです。屋上にバスが残された石巻市雄勝公民館（おがつ）の映像はまさに津波の恐ろしさを実感させるものでした。また、一方では、未だ出口の見えない福島原発事故も深刻な問題となっています。あれから8ケ月の時を経て、今なお困難な状況におかれている皆様に、謹んでお見舞い申し上げるとともに、早期の復興支援活動に従事しているすべての皆様に心から敬意を表し、一日も早い復興を心よりご祈念申し上げる次第です。

さて、この東日本大震災に関わり、最初に二つの記事をご紹介させていただきたいと思います。

ひとつは、６月に掲載された日本教育新聞の記事です。

「東日本大震災の被災者支援で、学校はもとより、公民館、博物館などの生涯学習施設の役割が見直されたが、特に、学校・家庭・地域が一体となって子どもを育てる学校支援地域本部事業の設置校は、震災避難時、避難所運営、学校の復旧などに大きな役割を発揮していたことが、6月3日に文部科学省内で開かれた中教審生涯学習分科会で明らかにされ、同事業の役割が、改めてクローズアップされた。」

この記事の元となっているのは、本部の震災時の様子について、宮城県内の小中学校の校長40名への聞き取り調査でした。「避難所において自治組織が立ち上がる過程は順調だったか。」という問に対して、本部設置20校の校長は、95%が「順調だった」と回答しており、「混乱が見られた」との回答は皆無であったとのことです。一方の本部未設置20校の校長の回答は、「順調だった」が35%であり、「混乱が見られた」との回答は40%となっている。また、本部未設置の校長からは、「物資を配布するにも、避難者の顔もわからず混乱した」というコメントも紹介されています。

もうひとつは、４月１３日付の読売新聞の記事です。

町の大半が大津波にのまれた岩手県大槌町(おおづちちょう)の避難所となっている県立大槌高で約８００人の住民が不安な日々を送るなか、高校生が中心となり避難所運営にあたったという記事です。食料を集めるために、ひかない水の上に浮かんでいた段ボール箱から魚介類を、集めたり、その他の食材もがれきの山から探し出し、食糧確保に奔走したとのことです。また、食材だけではなく、使った食器はプールにたまって

いた水で洗い、トイレで使う水もバケツやペットボトルで運ぶなど、まさに、避難所運営の中心が高校生たちであったと報じています。一方、大人たちはどうか、と見れば、肩を落とし、悲嘆にくれていたのですが、高校生たちの姿によって、大人たちも一斉に腰をあげたとのことです。

これらの二つの記事に共通して言えるのは、これまでの社会教育の成果と捉えることができるのではないかということです。地域の絆を構築し、子どもたちのボランティアマインドを育んできた、まさに「社会教育の力」だと思います。昨今の厳しい財政状況を反映し、社会教育行政の疲弊は見るも無残な状況にあります。今回の大震災に際して、社会教育が大きな力となったことを、今一度確認し、私たちの手で「社会教育の復興」を加速させなければならないのではないかと思います。

日本生涯教育学会には、北海道と九州に二つの支部があります。北海道と同じく九州支部においても、毎年「中国・四国・九州地区生涯学習実践交流会」を開催しております。今年は、九州はもとより関東以西から１２００人余りが参加し熱のこもった意見交換がなされたと聞いております。このたびの講師としてお越しいただいております森本先生も、代表世話人をお勤めでいらっしゃいます。

この生涯学習実践交流会は、次年度から「生涯学習」を「生涯教育」に変え、生涯教育実践交流会と改称することとなったそうです。変更理由としては、「国民の恣意的な選択に基づく」生涯学習では、変化の時代への対応も地域の再生も困難であると判断し、社会教育を専門とするものは社会や市民が必要とする「あるべき生涯教育」を語るべきであるという考え方にたったと言うことです。このようなお話をしていながら、本支部のこの研究集会も生涯学習研究集会となっていますので、次年度の30回大会に向けて、議論することも必要ではないかと個人的には思っております。

また、島根県が、生涯学習課を社会教育課に看板を戻したことは、すでに皆さんも聞き及んでいるのではないかと思います。島根県は、これまで県教育委員会から市町村教育委員会へ派遣する社会教育主事の職名を、「地域教育コーディネーター」としていましたが、「派遣要綱」を改定し、「社会教育主事」に職名を変更しています。こうした社会教育復権の動きは、一部ではありますが散見できるようになってきました。昨年度のデータで見ますと、課名に社会教育があるのは、４７都道府県の中で13であります。とりわけ、九州は長崎・宮崎を除く全県で「社会教育」の表記がなされています。かつて、社会教育を生涯学習へと安易に看板を変えたことに対して、地域社会が揺り戻しを図っているとも感じます。

学びたいものを学ぶことを否定するつもりはありませんが、地域・社会の一員として学ばなければならないものを如何に提供するか、ということの重要性が改めて、注目されているところではないでしょうか。そうしなければ、変化の時代への対応も地域の再生も困難であるという先の九州支部の考えには、大いに共感するところです。まさに、時代は、社会教育の復権を待っていると言っても過言ではないのではないでしょうか。

本年度の研究集会では、『青少年の育ちを支援する**社会教育**の在り方とは～ひとりひとりの子供が安心して過ごせる社会を目指して～』を全体テーマとして、シンポジウムと特別講演を行います。講師には、ＮＰＯ法人幼老共生まちづくり支援協会理事長としてご活躍の森本精造先生に、福岡からお越しいただいております。シンポジウムのコーディネートと特別講演をお願いしております。

１日という限られた時間ではありますが、今日はそれぞれのお立場で、社会教育を大いに議論していただければと考えております。長くなってしまいましたが、以上で、主催者を代表しまして開会のご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

（平成23年11月19日（土）　札幌市生涯学習センター「ちえりあ」）

第 29 回　北海道生涯学習研究集会
2011. 11. 19

## ■ 北海道の広域性に対応する巡回学習会（道南ブロック）！
## 平成23年度日本生涯教育学会北海道支部巡回学習会

10月22日（土）　道立洞爺少年自然の家（ネイパル洞爺）

### 基調講演　遠藤 知恵子 氏（前北翔大学 学長）
### 「生涯学習社会の構築へ向けて～これからの生涯学習推進行政が育むべきもの～」

10月22日（土）の雨の北海道立洞爺少年自然の家で、北翔大学学外研究員・前北翔大学学長の遠藤千恵子氏による基調講演「生涯学習社会の構築へ向けて～これからの生涯学習推進行政が育むべきもの～」と題し、社会教育行政の縮減・新しい公共政策の必要性・協働の時代の学習支援などについて、お話いただきました。

実践報告では、室蘭市地域リーダー派遣交流事業に参加したことを機に、鉄の街の室蘭の活性化をめざし、活動されている胆振情報ネットワーク代表幹事の池野貴章氏よる各種事例報告をいただきました。

その後の意見交換では、遠藤先生と池野氏に共通する、行政の役割は「グループをつなぐ」、支援者は「学習者が自分たちの課題をさぐる」について、そして池野氏の実践活動が社会教育主事に求まれている役割に近いが、社会教育主事は全国的に縮減傾向にある中で、社会教育主事の意識と行動を変える必要もあるのではないかなどについて参加者で意見交換を行った。

## ■ 第29回 北海道生涯学習研究集会 ・・・ 11月19日（土）「ちえりあ」で開催 ！

### 基調講演　森本 精造 氏（NPO法人 幼老共生まちづくり支援協会 理事長）
### 「青少年の育ちを支援する社会教育の在り方とは」

北海道らしい生涯学習社会の実現を目指して、道内の生涯学習に関わる研究者、実践者及び生涯学習に関心を持つ道民等が一堂に会し、日頃の研究成果や実践の発表及び意見交換を通して、相互の交流を深め、協力関係の一層の促進を図ることを目的とした第２９回北海道生涯学習研究集会を開催しました。

今年度のテーマは、「青少年の育ちを支援する社会教育の在り方とは～ひとりひとりの子どもが　安心して過ごせる社会を目指して～」です。現在も増加傾向にある北海道内の不登校児童生徒数や深刻化しているひきこもり・児童虐待等の状況、さらには学校外の体験活動へ参加する子どもの減少及びその効果の非持続性等の現状を踏まえ、青少年の育ちを支援する社会教育の在り方をテーマとした研究集会でありました。北海道内の生涯学習に関わる研究者や実践者など、生涯学習に関心のある道民がその垣根を越えて一堂に会し、研究成果の発表や情報交換を行う集会でありました。多くの皆様にご参加いただきありがとうございました。

## ■ 今年は、北海道支部創立30周年です。

日本生涯教育学会北海道支部は、会員並びに道内生涯学習関係者の研究・実践の発表を通して相互の研鑽を図ることを目的として、昭和58年に横澤厚彦氏(平成14年にご逝去)のご尽力により誕生いたしました。来年は、支部の創立から３０年を迎えることとなります。
昨年９月に３０周年記念事業開催にあたり、支部顧問・役員の皆様からご意見をいただきました。北海道のこれまでの生涯学習の変遷を記録した記念誌の作成や、３０周年記念の北海道研究集会の持ち方など活発な意見が出されました。今後は、会員からの意見も踏まえ、事業計画を確定し、年度内にも準備をスタートさせたいと思っています。

## ■ 新会員の紹介　千葉　圭説　氏　北翔大学生涯学習システム学部芸術メディア学科　准教授

## ■ 事務局より

穏やかな新しい年を迎えました。会員の皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。
昨年は東日本大震災により未曽有の大被害をもたらしましたが、今年は皆様にとって良き年でありますようお祈り申し上げます。
今年は支部にとって、支部創設３０周年という節目の年を迎えます。これから本格的な準備に取り組んでまいりますが、　３０周年記念事業として、北海道生涯学習研究集会の持ち方など活発なご意見をお寄せください。
更に、平成２４年度は支部役員の改選時期であります。例年通り、紙上総会において会員の皆様にご案内させていただきますので、よろしくお願い申し上げます。

## アルバム 2010　・・・・・・・北海道生涯学習研究集会（2011.11.19）・・・・・・・・